

## 「わたしもあなたを罰しない」

ヨハネによる福音書 8章 1節～11節

説 教 久保田拓志伝道師

この物語が始まる少し前、イエスという人物はいったい何者なのかということをめぐる、人々の間で論争がおきていました。当時のユダヤ人指導者たちは、多くの人々がイエス様を信じるのを見て、彼を亡き者にする機会をうかがっていました。指導者たちは、イエス様によって自分たちの宗教的支配体制が覆されるのではないかと不安を抱いていたのです。

そのような、緊迫した情勢の中で、この罪を犯した女性が、律法学者やパリサイ人、すなわち当時の社会の中では法の番人とされていた人々によって、ひきたてられてきました。裁きの場に立たされたこの女性の、詳しい罪状はわかりません。ただ、姦淫の場で捕まえられたのみ、聖書は語っています。モーセの律法を犯した罪。それは当時のユダヤの社会では、神様との契約を破るということの意味していました。女性をひきたててきた目的は、ただ一つ。イエス様を逮捕し、訴える口実を作るためでした。しかし、彼らの訴えを聞いたイエス様は、意外な行動に出ました。何もお応えにならず、地面に何かを指で書き始めたと聖書は記しています。

何か地面に書き続けられていたイエス様は、顔をあげられませんでした。律法の番人である律法学者たちやパリサイ人の悪意に満ちた問いかけを、無視されていました。人間の思惑や計画だけに支配された世界から、イエス様は顔をそむけ無視をされます。うつむいて、何かを書き続けるイエス様の悲しみがそこにはあるように、私は感じます。

律法学者やパリサイ人たちは、それでも、なおしつこくイエス様に、この女性の罪に対して判決を下すように迫りました。とうとうイエス様は立ち上がりました。その言葉を一同、固唾をのんで待ったことでしょうか。しかし、発せられた言葉はきわめて簡潔でした。「あなたがたの中で罪のない者が、まずこの女に石を投げつけるがよい。」(7節)

その時、イエス様をつるし上げるようにして、徒党をくんで取り囲んだはずの人々が、いつの間にかイエス様の前に個人として、一人の人間として立たされているという逆転が生じました。一人、また一人と立ち去ったという表現に、そのことが見て取れるのではないのでしょうか。そして、この女性もまた、一人の人間として主の前に立たされていたのです。

女性は中にいたまま残されました。律法学者やパリサイ人に引き立てられてきたこの女性は、自分を連れてきた人々と同じようにイエス様の前から立ち去る、ということをしませんでした。「主よ、だれもごさいません。」(11節)これが、この女性が発した唯一の言葉です。私の真の裁き主がここにおられる、そして、真の裁き主であるこの方こそ、私の救い主だと、この女性は悟ったのでしょうか。主よという呼びかけは、私の救い主よという呼びかけでもあります。主イエスの前に、ありのままの姿で、たった一人で立たされることになったこの女性は、もはや逃げることも隠れることしませんでした。「わたしもあなたを罰しない。お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように。」(11節)とイエス様はこの女性に語り掛けました。

私たちの人生は、週ごとにご復活の主イエスを礼拝する教会へと集められる人生です。今日皆さんは、師走で気ぜわしい、夫々の家から教会へと出てこられました。しかし、同時にそれは、教会に帰ってきたということでもあります。そして、この礼拝から、皆さんも家路につかれます。家に帰ることになります。しかし、それは、教会から各自の持ち場へと遣わされる、出ていくということの意味をしています。その繰り返しの中で、私たちは自分の人生の旅路を歩みます。それは、単なる繰り返しではありません。教会に帰ってきた時の姿と、教会から出ていく時の姿は、見かけは同じでも中身は違ってきます。罪赦された罪人として、赦されたありのままの姿で主イエスの御言葉をこの身にいただいて、ここから出ていくのです。そこに、あなたという一人の人間にだけに備えられた、特別な道がある。主イエスが備えてくださっているあなただけの人生の旅路が、備えられています。

「わたしもあなたを罰しない。お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように。」という主イエスの御言葉を聞いたこの女性の物語に、私たちの人生もまた繋がられています。そして、聖書に登場するこの無名の女性と共に、私たちもまた、罪の赦しの宣言を主からいただいています。「わたしもあなたを罰しない。あなたの最も深い場所、もっとも恥ずかしい場所に私はいて、あなたの罪はこの私が引き受けるから」と。この主イエスの愛を胸に抱いて、新しい年へと共に出発したいと願います。

(記 久保田拓志)